



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大テロル下ソ連農村の政治過程 : 1936年の農業不振とアゾフ=黒海地方
Author(s)	内田, 健二; Uchida, Kenji
Citation	スラヴ研究, 38, 91-120
Issue Date	1991
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5198">https://hdl.handle.net/2115/5198</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113329.pdf



# 大テロル下ソ連農村の政治過程

—1936年の農業不振とアゾフ＝黒海地方—\*

内 田 健 二

## 目次

はじめに

- 1 1936年の農業カンパニア
  - 2 アゾフ＝黒海地方における農業カンパニア
  - 3 植林事業と北部＝ドン管区
  - 4 肅清
- おわりに

## はじめに

アゾフ＝黒海地方は、アゾフ海と黒海の東海岸に位置する主要穀物地帯の一つである。本稿は、このアゾフ＝黒海地方における1936年秋の農業カンパニアを取り上げ、そのカンパニアが同地方にもたらした政治的帰結について検討する。対象をこのように設定した理由は、一面では資料上の制約によるが、他方、より積極的にいえば、1936年は全国的に農業生産が失敗した年であり、しかもその翌年、同地方で最高指導部をも巻き込んだ大規模な肅清が実施されていることにある。これら二つの出来事の間には、密接な、あるいは少なくとも何らかの関連があったと考えてよいであろう。この関連を実証的に明らかにすることが、本稿の第一の課題である。

さらにこの問題の検討は、アゾフ＝黒海地方という一地方の政治過程に留まらず、この時期のスターリン体制がもった政治的特質を理解するうえでも重要な示唆を与えるように思われる。それは以下の二点に関してである。第一は、1930年代を通じて講じられたスターリン体制の危機管理策とでもいうべき政策の特徴に関連する。

アゾフ＝黒海地方は30年代、その成立の時を含めると二度にわたって分割の対象となった。すなわち、同地方は34年、北カフカーズ地方分割の産物として誕生し<sup>1)</sup>、さらにその後37年には、ロストフ州とクラスノダール州に分割されたのである<sup>2)</sup>。この二回の分割の背景には、共通する一つの重要な特徴を見出すことができる。それは、分割に先立つ前の年の農業カンパニアが失敗ないし不振に終わったという事情である。36年の農業カンパニアについては本論に委ねるが、34年分割の前の32～33年については、すでにいくつかの研究によって、農業生産と穀物調達に失敗し、北カフカーズやウクライナなどで大規模な飢饉さえ生じたことが明らかにされている<sup>3)</sup>。しかも34年、分割は北カフカーズのみならず、中流・下流ヴォルガなど、他の穀物地帯にも及んだのであった<sup>4)</sup>。

30年代の中央—地方関係にみられる重要な特徴の一つは、行政区画の細分化と中間階梯の廃止によって、中央による地方支配を強化する試みが、何らかの重要課題が失敗した場合、必ずといってよいほどなされていることにある。上からの厳しい圧力と威嚇のもとで進められた農業カンパニアが不調なまま終わったとすれば、党中央は恐らく、農村および地方に対する統制がなお不十分であるとの認識を一段と強めることとなろう。地方や州という行政区画の分割・再編は、当該地方の指導者の権力基盤を削減して彼らに一種の罰を与えるとともに、地区および農村に対する上からの統制を容易にする意味をもったと考えられる。36年のアゾフ＝黒海地方における農業カンパニアの遂行過程は、以上の仮説を検証する一つの事例となるであろう。

第二の問題はいわゆる大テロルの背景に関してである。36年8月、ジノヴィエフ、カームネフらに対する「トロツキスト＝ジノヴィエフ派テロリスト合同本部」事件裁判が行なわれ、これを契機に「階級的警戒心」向上と「人民の敵」摘発キャンペーンが展開されたことは周知のとおりである<sup>5)</sup>。この粛清の波は、翌年1月に行なわれたピヤタコフ、ラーデクラに対する「トロツキスト＝ジノヴィエフ派並行本部」事件裁判<sup>6)</sup>と、2—3月の党中央委員会総会を経て、最大の高まりをみせるに至った。最高指導者の一人、オルジョニキーゼが自殺したのはこの2月であり、またブハーリンが有名な口述による遺言を妻にたくしたのはその直後のことであった<sup>7)</sup>。

この頃、何が中央の指導部内で起こり、また何を直接的契機として37年以降の大テロルの高潮が生じたかは、党のアルヒーフが公開されない限り十分解明されないであろう。恐らく、これまで自らの政権を支えてきた者をも含む旧来の指導者に対するスターリンの猜疑心と復讐心、36年9月、ヤーゴダの跡を襲って内務人民委員に就任したエジョフの個性など、指導者個人の性格が大テロルのなかで大きな位置を占めたであろうことは否定しえない。さらに、社会的なヒステリー状況を煽る形で組織された「敵」摘発キャンペーンが、活動家に自己保身のための告発を強要し、必然的に自己増幅作用を帯びたという側面も見逃がすわけにはいかない<sup>8)</sup>。

いうまでもなく、大テロルには様々な要因が絡み合っていたとみるべきであろう。当時の社会的経済的情勢もその重要な要素を構成していたであろう。しかし今までのところ、それについての研究はほとんど存在しないといってよい<sup>9)</sup>。それゆえ本稿では、36年の農業生産の失敗が大テロルの重要な一つの背景をなしたのではないかという仮説から、この問題に接近したい。それは、農業カンパニアの分析を通じて、きわめて広範囲に及んだ大テロルの一側面を新たに明らかにしうると考えるからである。

## 1 1936年の農業カンパニア

アゾフ＝黒海地方についてみる前に、まず1936年の全国的な農業生産と穀物調達カンパニアの遂行状況を概観しておかねばならない。

36年の農業は、綿花生産を除けば極度の不振に終わった。A・ノーヴの推計によれば、この年の穀物の総収穫高は、次表が示すように、35年の7500万トンより2000万トン近く低い5610万トンでしかなかった。これは33年以来最低の水準であった<sup>10)</sup>。主要穀物地

帯が例年にない早魃の被害を受けたことが、その主たる原因であった。この凶作について我々は、断片的ではあるが、当時の資料からいくつかの情報を得ることができる。

表 穀物の総収穫高 (100万トン)

1933年	34年	35年	36年	37年
68.4	67.6	75.0	56.1	97.4

(出典)：注10)参照

小麦、大麦やキビなどの禾穀類 (колосовые культуры, 以下、穀物と呼ぶが、とうもろこしは含まない) については8月末から10月にかけて、クリミア、アゾフ＝黒海地方、ウクライナなどから調達計画の達成が報告され、穀物調達は順調な滑り出しをみせた<sup>11)</sup>。この初発の成功は年末に再度想起され、36年のようなかつてない早期の調達は、早魃という「極度に不順な気象条件」をも克服したコルホーズ制度の優位性を示すものであると、大々的に喧伝された<sup>12)</sup>。しかし宣伝と実態の間には大きな隔たりがあった。

作物の生育期にあたる5～6月に降水量が極端に少なかったことは、とりわけ春播き作物に大きな打撃となった。早魃はヴォルガ流域で最も甚だしかったが、その隣のアゾフ＝黒海地方においても5月から6月半ばまでほとんど雨がなく、5月の降雨量は8.6ミリと、過去数年間のうちで「最も不順」であった<sup>13)</sup>。ある論者によれば、36年の収穫高は過去の早魃の年より高い (たとえば21年より何倍かは高い) が、「容認できない低い水準」にあったという<sup>14)</sup>。

36年の時点では不作を匂わせることもなかった政府ではあるが、37年にはいると、それを公式に認めるに至る。たとえば、37年度国民経済計画に関する3月29日付政府決定は、ウクライナ、アゾフ＝黒海地方、シベリアでの成果を称揚する一方、「ヴォルガ流域と南東部での深刻な早魃が……それらの地域での穀物の低収穫に反映した」ことを確認した<sup>15)</sup>。さらに不作を認めたもう一つの例が、37年3月20日付の閣僚会議＝党中央委員会決定である。これは、36年の穀物供出未納分を、すべての地方のコルホーズと個人農経営に対して帳消しにした決定であるが、このような決定が出されたことは、深刻な不作によって供出すべき穀物がもはや彼らの手元にはなかったことを示唆する<sup>16)</sup>。

このように、36年は中央も認めざるをえないほど、多くの地方にとって凶作の年となった。「深刻な早魃」に見舞われたヴォルガ流域のクイブィシェフ地方 (中流ヴォルガ地方が35年、一部地域割譲のうえ改称された) の農業にとって、36年は「過去半世紀の間で最も不順な年であった」とさえ言われた。ヘクタール当りの穀物の平均単位収量は3.6ツェントネル (360キログラム) に留まった<sup>17)</sup>。これは通常が6～8ツェントネルであったことを考えると、きわめて低い数字であった。こうした状態のもとでは、食糧問題が危機的な局面を迎えるであろうことは想像に難くない。恐らく32～33年の飢饉から教訓を得たのであろう、政府は凶作に悩む地域に多額の「援助」を与えた。

クイブィシェフ地方のコルホーズは36年、400万プードの穀物と200万プードの飼料貸付けを受け取ったほか、国家に対する過去の負債と МТС<sup>エム・ティ・エス</sup>への現物支払いの著しい減額、穀物供出義務の延期、1800万プードの播種用種子の貸付けという「援助」を受けた

という<sup>18)</sup>。西部州も食糧援助の対象となった。州第一書記ルミヤーンツェフによれば、州は33年に続いて食糧貸付けと播種用種子を与えられたが、州のコルホーズは当時、「国家援助なしにはやっていけない」状態にあったという<sup>19)</sup>。

旱魃は家畜用飼料の生産に対しても深刻な影響を及ぼした。すでに8月上旬には、「個々の州と地区が牧草の不作」に見舞われているとの警鐘が鳴らされ、とりわけヴォルガ流域諸地区の活動家は、「例年の2倍の精力で」飼料調達に取り組むよう求められた<sup>20)</sup>。不作はヴォルガ流域に留まらず、いくつかの地方が基本的な粗飼料の不足から、飼料問題で緊張した事態を迎えた<sup>21)</sup>。ヤロスラーヴリ州では、多くの家畜が「飼料が足りないという口実のもとに」屠殺されて、売られたりコルホーズ員に作業日への報酬として支払われたりした。同州パルキンスク地区の指導者は、四分の一の家畜を「除去」するよう指示したとも非難された<sup>22)</sup>。

さらに秋になると、家畜の冬越し用飼料が重大な関心事となった。それまで副次的とみなされてきたビートやじゃがいもの茎や葉、とうもろこしの茎、もみがらなどに加え、雑草や「非常時にのみ利用できると考えられてきた小枝などの飼料(веточный корм)」をも精力的に準備するよう求められた<sup>23)</sup>。しかし、このような努力によっても飼料不足を解消することはできなかった。37年1月、クイブィシェフ地方では粗飼料の貯えが底を突き、濃厚飼料の分野でも「緊張した事態が生じている」といわれた<sup>24)</sup>。飼料不足は家畜の大量死をもたらし、政治問題にまで発展する可能性をもつ。36～37年冬の飼料不足はアゾフ＝黒海地方において重要な政治的意味をもつが、これについては後にみることにしたい。

農業生産が失敗に終わった以上、穀物調達は一層苛酷な様相を帯びざるをえない。たとえばチェリャビンスク州では、穀物供出計画を達成したコルホーズにさらに追加的な供出課題が課せられ、地区全体で何とか計画の達成を図るという方式がとられた。その結果、相対的に収穫が良かったコルホーズを含め、一連のコルホーズが同様に「困難な状態」に陥った。37年の春播き時には播種用種子をもたないコルホーズも少なくなく、国からの食糧と種子の貸付けが必要となるほどであった<sup>25)</sup>。穀物調達に「成功」したウクライナでも、オデッサ州をはじめ、春播き用種子が不足する事態に立ち至った地方も少なくなかった<sup>26)</sup>。これらのことは、低い収穫のもとで、取り上げうる穀物すべてが強引に取り立てられたことを物語る。

容易に想像しうるように、コルホーズ、農民に対して刑事罰を含むあらゆる圧力が加えられた。期限内に供出課題を達成できなかったコルホーズ、個人農に対しては、未供出分の市場価格に相当する罰金を行政手続きで課す制度が最大限活用された。後に戒められたことではあるが、恣意的な罰金賦課が調達過程で大規模になされたという<sup>27)</sup>。コルホーズ議長の罷免も相次いだ。しかし、地区組織の任命する議長の多くはコルホーズ員の支持を得られず、コルホーズ経営はかえって混乱を深めることともなった<sup>28)</sup>。

「スモレンスク・アルヒーフ」を検討したマニングは、穀物調達の過程で、西部州ベールィ地区の農民の敵意がきわめて強くなったと指摘している。彼女によれば、穀物調達を強行した場合、地区委員会書記さえも「地区から叩き出されるかもしれない」と恐れるような雰囲気も生まれていたという<sup>29)</sup>。恐らくこうした状況は、ベールィ地区に限らず、他の多くの地区でもみられたであろう。

現地の活動家も様々な圧力のもとに置かれた。地区やMTC、コルホーズに全権代表が派遣され、彼らは多くの場合、課題達成まで現地に張りつくよう命じられた<sup>30)</sup>。クラスノヤルスク地方では、「地区、ソフホーズ、MTCは地方党委員会の全権代表で氾濫した」と評されるような光景も生まれた<sup>31)</sup>。当時実施されていた党員証交換カンパニアも重要な「感化手段」として利用された。州・地方指導部は調達カンパニアで遅れている地区の党員証交換を中止させ、また地区党委員会も同様に、遅れている初級党組織の交換業務を差しとめた<sup>32)</sup>。課題を達成しないコムニストに対しては党員証の発行が拒否された<sup>33)</sup>。これは、党からの除名が実際には要職からの罷免、さらには解雇をも伴う<sup>34)</sup>ことを考えれば、党員、候補にとって強い圧力となったといつてよい。

しかしこうした圧力と威嚇にもかかわらず、調達は大きな困難を抱えた。とくに、西シベリア、チェリャビンスク、オムスク、クラスノヤルスクなど、東部地域で取り入れと調達は難航した<sup>35)</sup>。取り入れの遅れはもっぱら、コンバインが十分活用されていないためであると説明された。たとえば西シベリアでは、8月末、五日間での1台当りのコンバインの平均作業量は2ヘクタールで、ノルマの六分の一にも達しなかった<sup>36)</sup>。これは中央の判断によれば、秋の長雨による面があるにせよ、主として現地指導部の無為の所産であった。「正常な取り入れはある程度雨によっても困難になった。雨の日は昨年より多い。しかし、そのようなことで許容しがたいテンポの取り入れを正当化することはできない。……コンバイン作業の停止などを雨の所為にすることができるのは日和見分子だけである」というのであった<sup>37)</sup>。

東部諸地区のなかでも、とりわけ厳しい批判に晒されたのが西シベリア地方であった<sup>38)</sup>。取り入れの遅れは当然、調達のテンポに反映する。同地方のコルホーズは8月末の時点で、穀物供出計画をわずか5%遂行したに留まった<sup>39)</sup>。遅れた地区の典型として槍玉に挙げられたのはアンドレーエフ地区であった。そこでは、30人以上の全権代表がコルホーズに派遣されたにもかかわらず、調達はまったく進展しなかったという。この事態を伝えた論者によれば、それは彼らがサボタージュ分子に寛容であったからであり、しかも地区党委員会はそれらの全権代表に「寛容の罪で党的責任」を問わなかった。地区指導部のこうした「誤り」は、地方指導部の直接の介入によってようやく正され、供出成績の悪いコルホーズ指導部は「悪質なサボタージュ分子として罷免のうえ裁判所に引き渡された」<sup>40)</sup>。アンドレーエフ地区と同様、西シベリア地方の多くの地区党委員会には、「皆と仲良く暮らしたいという願いや『善良な子供たち』を『悪く言う』ことへの恐れなど」「ポリシェヴィズムと無縁」の気分が蔓延していると言われた<sup>41)</sup>。

このように、具体的に「サボタージュ分子」を摘発、処罰して、調達テンポを加速するよう求められたにもかかわらず、多くの活動家はその要求に応えることはできなかった。全権代表は「おしゃべり」「無駄話し」しかしていないという非難、彼らの非難した者が逆にコルホーズ員から同情された例、屋敷付属地での私的経営に精力を集中すべきだとする「サボタージュ分子の煽動」が、全権代表の威嚇にもかかわらず成功した例など、全権代表の「拙劣な活動」が数多く伝えられた<sup>42)</sup>。地区指導部が取り入れ・調達の失敗の責で罷免される事例もみられた<sup>43)</sup>。不作に悩む36年の穀物調達は、容易に進捗しうる状態にはなかったのである。

夏から秋にかけて、クリミア、アゾフ＝黒海地方、ウクライナから穀物調達計画の達

成が報告されて後、同様の達成報告が年内の『プラウダ』紙上で報じられたのは、ゴリキー地方、グルジア、北カフカーズ、東シベリアに関してだけであった。しかも東シベリアからの報告は12月も中旬になってからであった<sup>44)</sup>。調達が遅れた結果、多くの地方のCOLHOZ員と個人農はきわめて遅くまで、市場などで穀物を販売する自由を与えられなかった。それは、「穀物供出計画の達成」と「春播き用種子の確保」が、穀物販売を許可する際の条件とされていたからであり、その許可が与えられたのは、多くの地方にとって36年末から37年にかけてであった。たとえば、クルスク州、スターリングラード州、および第一書記ルミヤーンツェフが農業生産の失敗を率直に認めた西部州<sup>45)</sup>に対しては1月初め、調達がきわめて難航した西シベリア地方は1月末、チェリャビンスク州、クラスノヤルスクおよびクイブィシェフ地方は2月半ばであった<sup>46)</sup>。

このようなきわめて遅い時期の穀物販売許可は、多くの地方で調達がいかに困難であったかを改めて物語っている。換言すれば、36年の穀物調達は、クリミアなどのいくつかの地方を除けば、大幅に長引き、決して成功したとはいえない状況であった。しかもすでに指摘したように、強圧的に調達を達成したオデッサ州などでは、春播き用種子の深刻な不足に見舞われたのであった。では、早期に穀物調達達成を報告したアゾフ＝黒海地方ではいかなる問題が生じていたのか、次に検討することにした。

## 2 アゾフ＝黒海地方における農業カンパニア

1936年夏、アゾフ＝黒海地方も他の地域と同様、旱魃の大きな被害を受けた。同地方は例年、東からの乾燥した強い風、スホヴェイの影響により、収穫の「二分の一から三分の一」を失っていると言われたが<sup>47)</sup>、36年は旱魃がこれに加わったのであった。その結果、通常春播き小麦などより高い単位収量を記録する秋播き小麦でさえ、「いくつかの地区で」予想をはるかに下回る不作となった。たとえば、ヘクタール当り25～30ツェントネルの予想に対し、実際の単位収量は10～12ツェントネル、15ツェントネルの予想の所では4ツェントネルであった<sup>48)</sup>。

それにもかかわらず、アゾフ＝黒海地方はすでに述べたように、クリミアに次いで全国で二番目に早く穀物の取り入れと供出を達成した。『プラウダ』は36年10月、アゾフ＝黒海地方についての特集を組み、同地方を「栄えある勝利者の隊列のなかでも名誉ある地位」を占めると、高く称揚した。32年のドンとクバンでの「反革命的サボタージュ」が「スターリンの指導と党中央委員会の介入」のもとに打ち砕かれて以来、状況は一変し、ドンとクバンは「永遠にCOLHOZ的……スターリン的となった」と言われたのである<sup>49)</sup>。

しかし、穀物調達に関するこうした高い評価の反面、秋耕カンパニアの進捗状況に対する評価には厳しいものがあつた。秋耕とは、土壌の保水力を高めるとともに害虫と雑草を取り除くため、春播き予定地を秋に耕すことであるが、これは乾燥地域における収穫向上にとって不可欠な措置として、政府が特に奨励していた施策の一つであった。10月4日付『プラウダ』の一論文は、アゾフ＝黒海地方における秋耕が9月25日現在、計画のわずか13%と、「警告を発する」低水準にあると強く非難した<sup>50)</sup>。他の地方よりもスホヴェイの被害を大きく蒙り、さらに旱魃とスホヴェイのダブル・パンチによっていくつかの地区で収穫を低下させたアゾフ＝黒海地方にとって、秋耕、しかも収穫後でき

るだけ早い時期の秋耕は、翌年の収穫を左右する重大な意味をもつと位置づけられていたのである<sup>51)</sup>。

10月4日付の『プラウダ』論文は、翌日の『モーロト』に転載され、これ以後、同紙は大々的な秋耕キャンペーンを展開した。10月10日、地方執行委員会農業管理局長オディンツォーフは、取り入れと秋播種で大きな成功を収めたものの、秋耕では「許容しがたく遅れている」と指摘して、「国家的法律」たる秋耕計画を達成しなかった者は、裁判所への引き渡しを含め厳しく責任を問われるであろうと、強い調子で警告した<sup>52)</sup>。これに続いて、現地指導部に対する責任追及が始まった。党統制委員会アゾフ＝黒海地方担当全権代表ブリーケは、クロポトキン地区のMTC所長を罷免警告付きの厳重処分が付すと同時に、同地区の「異常な遅れ」について地区党委員会書記と執行委員会議長に警告処分を科す決定を下した。また地方農業管理局も、秋耕に対する点検と統制を強めるよう求められ、いかなるMTCがいかなる理由で必要な措置を講じていないか、党統制委員会に報告するよう指示された<sup>53)</sup>。

地方党委員会ビューローと地方執行委員会も『秋耕経過について』決定を発し、MTC所長やコルホーズ議長に各種の処分を加えた。決定によれば、秋耕の遅れは最新式のキャタピラ・トラクターが十分活用されていないためであった。地区の指導者たちは雨などの客観的困難を理由にしているが、それは自らの拙劣な組織化活動を隠す口実にすぎないと断罪された<sup>54)</sup>。しかしこのような威嚇も事態の根本的改善をもたらさなかった。決定後10日経た後もなお、「許容しえない動揺(раскачка)」が多くの地区で続いた<sup>55)</sup>。

10月23日、地方党委員会は秋耕について再度決定を下した。それによれば、トラクターは燃料不足やプラウ・オペレーターの不足のため、多くが運転中止の状態にあり、徹夜の作業も照明用具の準備がないため実施されなかった。トラクターに代わる牽引用家畜の秋耕への動員もまったく不十分であった。地区指導部とMTC所長が「こうした非組織性を客観的理由で隠蔽している」のは「一層犯罪的」であった。地区党委員会は活動家をコルホーズやトラクター・ブリガーダに形式的に「張りつけ」ただけで、彼らが現地に赴くこともなかった。決定はこのように述べて、特に遅れたいくつかの地区の地区党委員会書記、MTC所長、コルホーズ議長に対し、裁判所への引き渡しなどの厳しい処分を加えた。そして決定はこの見せしめのうえに立って、すべての現地指導者に対して「秋耕計画不達成の場合、国家計画の失敗に対すると同様、法律のあらゆる峻厳さで責任を問う」旨、警告したのである<sup>56)</sup>。

ところで、秋耕の遅れはアゾフ＝黒海地方に限られなかった。政府は36年、春播き予定地のほぼ四分の三に相当する6800万ヘクタールでの秋耕を指示した。これは35年よりも900万ヘクタールの増であり、この「著しい引き上げ」がこれまで以上に計画達成を困難にする一因となった<sup>57)</sup>。もとより、穀物の取り入れと調達という苛酷で緊張したカンパニアで疲弊したコルホーズ員や活動家、さらには現地指導部にとって、早期かつ過大な目標の秋耕は容易に達成しうべくもなかった。

穀物供出後、中央の眼からみて弛緩した状態が各地に生まれた。多くの州と地方の指導者は、9月から10月上旬にかけての早期の秋耕の意義を理解せず、休みの気分を許容したと非難された。たとえばクルスク州では、州農業管理局長自身が休暇にはいり、州

党委員会もこれを許可した<sup>58)</sup>。オレンブルグ州の指導的活動家のなかにも、秋耕は雪が降るまでにゆっくり行なえばよいとする考えが広まっていると言われた<sup>59)</sup>。アゾフ＝黒海地方でも、地方党委員会書記マリーノフが自己批判しつつ認めたように、穀物供出後、「中休み」に入った地区は少なくなかった<sup>60)</sup>。

さらに、とうもろこしなどの取り入れと秋播種が秋耕に加わり、秋の農業カンパニアは一層緊張した活動を農民と活動家に強いた。多くの地区、コルホーズ、ソフホーズは、それらを同時に遂行しうる態勢にはなく、秋耕を後回しにして「農作業を順番に遂行するという悪名高い慣行」に従った<sup>61)</sup>。この点で、ソフホーズ人民委員部と農業人民委員部がとりわけ強く指導責任を問われた。ソフホーズ人民委員部とその地方機関は、個々のソフホーズでの活動状況を点検せず、取り入れなどを口実にした秋耕の遅れを容認したとして、その無能ぶりを激しく非難された<sup>62)</sup>。農業人民委員部の多くの指導的活動家も、「10～11月の耕耘も悪くない」と考え、地方に一般的指示を与えるだけで、各地のトラクター場が必要としている燃料や修理部品を適時に供給していないと非難された。10月10日から全国で一斉に始められた秋耕スタハーノフ運動旬間も、農業人民委員部がそれを宣言するだけで満足したため、逆に秋耕テンポの低下に終わったと言われた<sup>63)</sup>。

穀物調達と同様、州と地方の指導部は地区組織に連日大量の電報、決定を送り、また遅れた地区やM T Cに指導的活動家を派遣して、直接圧力を加えた<sup>64)</sup>。上からの圧力を受けた地区指導部は、同様に村ソヴェトやコルホーズに多数の全権代表を派遣した。しかしここでもまた、全権代表は期待された成果を挙げるができなかった。彼らは「統計を蒐集し、夜遅くまで会議を催す」だけで、トラクター手に対する賃金支払いの確保、畑でのトラクター修理の組織化、牽引用家畜による耕耘など、秋耕を成功させるための実務的指導を与えていないと、相変わらず非難されたのである<sup>65)</sup>。

以上のように、36年の秋耕カンパニアは全国的に不調であったが、そのなかでもとりわけ厳しい批判を浴びたのがアゾフ＝黒海地方であった<sup>66)</sup>。ある『プラウダ』社説は、「許しがたく遅れた地方」としてアゾフ＝黒海地方を挙げ、「雨ですべてを説明している」と地方指導部の対応を批判した。遅れの原因についての「より正しい説明」は、「現地組織の指導者が休みに気持ちを切りかえ、著しい数の地区党委員会書記が休暇に出かけてしまったため、農業機関の副次的活動家が秋耕を指導している」ことにあった<sup>67)</sup>。

アゾフ＝黒海地方に対して政府が定めた秋耕達成の期限は10月20日であった<sup>68)</sup>。この期限が過ぎた後の10月末から11月にかけて、現地活動家に対する威嚇と圧力はさらに鋭さを増した。10月10日から実施されたスタハーノフ運動旬間が失敗に終わるや、同地方では独自にその11月5日までの延長が決定され、そしてそれは再度15日まで延長されて、一層緊張した突撃的活動が要求された<sup>69)</sup>。秋耕成績の悪い現地指導者は名指しで「怠け者、日和見主義者」と非難され、罷免のうえ裁判所に引き渡された<sup>70)</sup>。

11月9日、地方党委員会と執行委員会は改めて、異例なまでに厳しい調子の決定を発した。決定は、これまでに地方党委員会の批判を受けたいくつかの地区が秋耕指導を改善したことを認め、その地区指導部に対して以前に科した処分を撤回する一方、なお「著しい部分の地区」が秋耕を「犯罪的に失敗させつつある」と断定して再び処分と警告を加えた。決定における非難の調子は一段と高まり、あるM T C所長の活動に対しては、

「破壊活動を行なっている敵の行為」と呼ぶまでに至った。そして決定は、特に遅れた9地区の党委員会書記と執行委員会議長を名指しして、警告付きの改善命令を発して最後通牒を突きつけたのである<sup>71)</sup>。

こうして上から加えられた強い圧力と威嚇は、いわば拡大再生産されて、再度末端の活動家へと転嫁された。たとえば、先の11月9日付決定で最後通牒を突きつけられたセーヴェルスク地区では、「秋播きと秋耕の満足しえない遂行状況に関連して」コルホーズ議長らの活動家に大量の処分が下された<sup>72)</sup>。地区指導部はコルホーズ議長の罷免やコルホーズ員への罰金など、カンパニア終了後には「コルホーズ員に対する専横」、「コルホーズ模範定款の侵犯」などと非難される方法によって課題の達成を図った<sup>73)</sup>。このような強圧的手段の全面的適用によって、アゾフ＝黒海地方は期限より1ヵ月遅れた11月21日、ようやく秋耕計画を達成したのであった<sup>74)</sup>。しかしこのことは、逆に言えば、期限内の早期の秋耕という点では失敗を意味したのである。

### 3 植林事業と北部＝ドン管区

アゾフ＝黒海地方での秋耕が困難を抱えた背景には、同地方における1936年秋の農作業の特殊性が存在した。その特殊性とは、旱魃・スホヴェイ対策として地方指導部が最も力を入れた大規模な防風林の植林事業を、穀物調達後冬の訪れ前に、すなわち秋耕と並行して実施せねばならないことであった。

地方党委員会第一書記シェボルダーエフによれば、同地方の農業は常にスホヴェイと旱魃の脅威に晒されていた。スホヴェイが作物生育期に数日間続くだけで、収穫は大きな被害を受け、また冬の強風も土壌から熱を奪って秋播かれた種子を台無しにした。彼によれば、スホヴェイの影響を受けるのはアゾフ＝黒海地方に留まらず、北カフカーズ、スターリングラード地方、ドニエプロペトロフスク州、オデッサ州などを含む最も肥沃な主要穀物地帯全体であり、しかもスホヴェイがカスピ海から運んでくる塩分を含んだ砂によって、それらの地域の砂漠化が進行しつつあった。したがって、乾燥地向けの農業技術、いわゆる「乾燥地農法(сухое земледелие)」(秋耕、種子の品種改良、クローバーの栽培など)を適用するだけでは旱魃・スホヴェイ対策として不十分であり、「根本的な国家的措置」が不可欠であった。そのなかでもシェボルダーエフが特に必要性を強調したのが、防風林と防風地帯の創出であった。彼によれば、防風林のある地域となない地域の収穫は、それぞれ34年で10.5ツェントネルと5ツェントネル、35年で11ツェントネルと6ツェントネルであり、単位収量向上のためには大規模な植林が決定的な意味をもったのである<sup>75)</sup>。

当時、単位収量の向上は農業にとっての至上命令であった。32年9月29日付党中央委員会＝閣僚会議決定『単位収量向上の措置について』以来、農業は、これまでの播種面積の外延的拡大から単位収量の増大をめざした集約的経営へと、中心課題を移すことが求められていた<sup>76)</sup>。しかもスターリンは35年12月、この年の豊作に自信を得て、先進的コンバイン手会議の席上、「この近い将来に70～80億プードの穀物を」毎年収穫するよう号令を発した。彼によれば、この課題は3～4年で実現可能であった<sup>77)</sup>。したがってこれ以後、農業生産の基本的スローガンは「ここ3～4年以内に70～80億プードの穀物を」と定められ、各地方はそれに応じた収穫の増大を図るよう求められたのである<sup>78)</sup>。

スターリンの課した収穫高は、35年の播種面積で計算すれば、平均13～14ツェントネルの単位収量を意味した。豊作であった35年の、しかも土地が肥沃な南部での秋播き小麦（この作物は通常、春播き小麦より単位収量が高い）の平均単位収量が8.4ツェントネルであった<sup>79)</sup>ことを考えると、スターリンの指示はきわめて実現困難であったと言っ  
てよい。播種面積の拡大を追求しないアゾフ＝黒海地方にとって、状況は一層厳しかった。ある論者によれば、秋播き小麦の単位収量は過去、クバンで9～12ツェントネル、中部および北部諸地区で6～8ツェントネルであったが、スターリンのスローガンを実現するためには、単位収量を17～21ツェントネルに倍増せねばならなかった<sup>80)</sup>。したがって、植林された地域の単位収量が、そうでない地域の倍近くあるという先のシェボルダーエフの認識からすれば、課題の達成にとって大規模な植林が決定的に重要であったのである。

アゾフ＝黒海地方は独自の植林三ヵ年計画を立て、これへの承認と援助を中央政府に求めた。36年1月の中央執行委員会第2回会期において、同地方執行委員会議長ラーリンは、地方の「東部および北東部での植林事業を36年、展開するという問題を真剣に提起する」と述べ、発電所建設などとともに、政府に援助を要求した<sup>81)</sup>。植林計画の大綱は南部および南東部での植林を含めて政府によって承認され<sup>82)</sup>、36年秋より本格的な植林が開始されることとなった。8月に開催された第6回地方党委員会総会は、61の地区について総面積50万ヘクタールに及ぶ36～38年植林三ヵ年計画を承認し、36年分として約8万ヘクタールの植林を指示した<sup>83)</sup>。

植林作業は取り入れ、調達、秋播きなど、秋の農作業が基本的に終了する10月上旬からの農閑期が予定された<sup>84)</sup>。この頃には秋耕もその大半が終わっているはずであった<sup>85)</sup>。したがって同地方指導部にとって、秋の農作業のできるだけ早期の完遂は、単に中央の指令の達成というだけに留まらず、植林事業の成否を左右するという点でも重大な意味をもった。しかし実際には、禾穀類の取り入れと調達は早期に達成されたものの、とうもろこしの取り入れ<sup>86)</sup>や秋播きなど、その後の一連の農作業は順調には進行しなかった。またすでに述べたように、秋耕も予定より大幅に長引いていた。その結果、大半の地区が植林とそれらを同時に遂行せねばならず、農作業、とりわけ秋耕の遅れと植林の遅れがいわば相乗作用をもつに至ったのである。

8月末、地方指導部は穀物調達後の農作業の遅れを批判するとともに、それが植林事業に否定的影響を及ぼす可能性について地区指導部に注意を促した。この点で特に強く注意を喚起されたのが北部＝ドン管区であった<sup>87)</sup>。同管区は、秋播きや秋耕など、地方全体での農業カンパニアの課題のうちほぼ20%の比重を占めるとともに、オブリフスク、モロゾフスク地区などの「早魃地区」を擁し、植林計画の成功にとっても重要な役割を担う地域であった<sup>88)</sup>。8月から10月にかけて、すでに述べたように、秋播きと秋耕で遅れている一連の地区への非難が激しさを増したが、北部＝ドン管区はその主たる矛先の一つであったのである<sup>89)</sup>。

秋耕などに追われる北部＝ドン管区にとって、植林事業はその準備段階から容易ではなかった。9月末、党統制委員会全権代表は植林準備状況について点検し、北部＝ドン管区を強く非難する決定を下した。決定は、植林用の苗木が不足し、また土地の開墾も進められていないとして、管区農業管理局長らを警告処分に付すとともに、管区党委員

会に対して是正措置を早急に講ずるよう指示した<sup>90)</sup>。植林用の土地の耕耘が進捗しなかった最大の原因の一つは、秋耕達成を命じられたMTCが、植林へのトラクターの提供を拒否したため、深刻な牽引力不足が生じていたことにあった<sup>91)</sup>。

前節で紹介したように、11月9日、地方指導部は秋耕の遅れについて異例なまでに厳しい調子の決定を発したが、そこで取りあげられたもう一つのテーマが植林問題であった。管区における秋耕について、決定は2地区（セリヴァノフスク、チェルヌィシェフスク）の「秋耕が遅れ続けている」として、党とソヴェトの指導者を名指しで強く非難したものの、管区全体としては秋耕テンポが上昇したことを認めた。この時点における管区の欠陥はむしろ植林作業にあった。決定は管区での植林を「まったく満足しえない」と断罪して、管区党委員会書記ルーキンとソヴェト議長カシーロフに計画の無条件遂行を強く求めた。決定によれば、北部＝ドン管区を含む多くの現地指導部のなかに、植林に対する過小評価が存在した。植林は、穀物調達などの農業カンパニアと同様、「ポリシェヴィキ的」姿勢で取り組まれねばならなかった。決定はすべての地区指導部に対して、必要な数のコルホーズ員の動員と作業班の組織化など、具体的措置を直ちに講ずるよう指示した<sup>92)</sup>。

この決定の後、アゾフ＝黒海地方がかりうじて秋耕計画を達成したことはすでに述べた。北部＝ドン管区も個々の地区は別として、全体として11月15日、秋耕計画を完遂した<sup>93)</sup>。しかし植林事業は結局、地方全体でも、また北部＝ドン管区でも失敗に終わった。しかも管区は、秋の刈り入れ後の畑の耕起という分野でも、課題を達成できなかった<sup>94)</sup>。管区書記ルーキンは穀物調達後の活動を振り返り、とりわけ植林事業で「十分な堅固性」を示しえなかったと自己批判した。管区指導部は「個々の遅れた指導者の保守性を打ち砕く」ことができなかった、というのである<sup>95)</sup>。このような発言は、現地の活動家のなかに、植林に対する少なからぬ抵抗があったことを示唆する。

11月9日付決定で断罪され、また管区全体での秋耕完遂後も計画を達成できなかったセリヴァノフスク地区では、植林計画の遂行も大幅に遅れ、11月中旬の時点で10%を少し越えただけであった。ヴォロシンスク、ミグリンスクその他の地区は、植林に本格的に着手さえしていなかった。植林用として供与された信用を、他に流用したコルホーズも数多く存在した。こうした事態を伝えた『モーロト』社説によれば、その責任の重要な部分は「植林をポリシェヴィキ的に指導しえなかった」地方農業管理局が負うべきであった<sup>96)</sup>。秋耕において「本質的にサボタージュ分子に寛容な態度をとっている」、あるいは「文書による指令の伝統が依然として優越的位置を占める」などと、その無能な指導振りを叱責されてきた地方農業管理局<sup>97)</sup>は、再び植林事業においても非難の的となったのである。

アゾフ＝黒海地方と北部＝ドン管区は、中央が強く求めた期限内の早期秋耕を果たせなかったことに続いて、スホヴェイの被害をくいとめ、単位収量を向上させるうえで決定的意義を有したはずの植林事業においても、勝利を語るができなかった。かくて地方と管区は、農業カンパニアの重要な失敗を残したまま、1936年を終えることとなったのである。

#### 4 肅 清

アゾフ＝黒海地方は1937年を大きな衝撃とともに迎えた。1月2日、党中央委員会が

『アゾフ＝黒海地方党委員会書記シェボルダーエフ同志の政治的誤りと地方党委員会の不十分な政治的指導について』決定を下し、「敵に対してポリシェヴィキにとってまったく許しがたい政治的近視眼を示した」として、シェボルダーエフの解任を指示したのである<sup>98)</sup>。中央から政治局員・書記アンドレーエフが同地方にのりこみ、決定の実施を指揮した。1月6日から7日にかけて、地方党委員会総会が彼の主導のもとに開催され、中央委員会決定とシェボルダーエフの解任、それまで北カフカズ地方党委員会第一書記であったエヴドキーモフの書記選出が承認された<sup>99)</sup>。

2日付党中央委員会決定から総会開催まで数日の間隔があり、また『モーロト』紙面も6日まで何の変化も示さず、7日に突如休刊となったことは、その間、地方指導部内に中央委員会決定に対する抵抗があったことを示唆する。恐らくこの抵抗に対する報復であろう、地方党委員会指導的党機関部長ベレジン、同農業部長マリノフらの党委員会ビューロー員は、総会の席上「厳しい政治的評価」を受け、他の指導的活動へ異動することとなった<sup>100)</sup>。地方執行委員会議長ラーリンは、アンドレーエフに協力的であった見返りであろうが、当面は難を免れた<sup>101)</sup>。

シェボルダーエフは当初、「政治的近視眼」、「呑気さ」などを非難されただけであったが、37年6月には「人民の敵の保護者」と、より厳しい評価を受けるに至る<sup>102)</sup>。彼の失脚はアゾフ＝黒海地方にとって、大規模な粛清の前兆であった。2月初め、コムソモール地方指導部の全面的な更迭が実施された。コムソモール中央委員会が同地方委員会ビューローの解散を決定したのである。コムソモール地方委員会書記エロフィツキーをはじめ、「コムソモール活動の決定的部署」を占めた多くの指導的活動家が、「トロツキスト」として断罪された<sup>103)</sup>。

36年秋の農作業に関連して強い非難を浴びた地方農業管理局の責任者オディンツォーフは、1月総会后その地位をマリノフに明け渡して以来、非難の対象として以外には、再び『モーロト』紙面にその名前をみせることはなかった。他の指導者に与えられた猶予期間もごく短かったことが後に判明した。一旦は難を免れたと思われたラーリン、ベレジン、マリノフ、ブリーケ（党統制委員会全権代表）も、37年6月までには「人民の敵」として摘発され、36年までの旧指導部はほとんど完全に一掃された<sup>104)</sup>。

シェボルダーエフ失脚直後、旧指導部に加えられた最大の非難は党の政治的＝組織的活動の軽視にあった。ある『モーロト』社説は、多くの党指導者が「政治的感覚」、「階級的警戒心」を喪失し、経済活動家になってしまったと非難した。かかる事態は「敵」の策動にとって恰好の土壌であり、彼らはこれを利用して、党、ソヴェト、経済機関の一連の重要な地位に潜入した。このことは、ロストフ、タガンログ、クラスノダールなど、同地方最大の都市党組織の混乱をみれば明らかである、というのであった<sup>105)</sup>。

「経済活動への埋没」という論理は、アゾフ＝黒海地方のみならず、当時、他の地方・州指導部に対しても向けられた批判の中心的テーマをなしていた。2月上旬のいくつかの『プラウダ』社説はこの観点からアゾフ＝黒海地方、キエフ州、ドニエプロペトロフスク州、クルスク州などの地方指導部を叱責した。「地方党委員会の関心の中心には日常的な実務的＝経済的問題だけが据えられ」、その結果、地区党委員会書記も同様に「トンヤツェントネルなど、文字どおりあらゆる種類の生産高の統計、報告に埋まって」しまった。「ポリシェヴィキ的活動スタイル」が忘れ去られ、「党の政治的組織化」の役割

が見落とされるとともに、党内においても自己批判がその「創造力」を失ったと批判されたのである<sup>106)</sup>。このような論調はその後、2～3月の党中央委員会総会決定を経て、一層ヴォルテージを高めつつ、粛清の重要な武器として機能することとなる<sup>107)</sup>。

しかしながら、かかる非難がいかにか声高に叫ばれようとも、アゾフ＝黒海地方における37年初頭の政変とその後の粛清を、党の政治的＝組織的役割を強調する先の論理ですべて説明するわけにはいかない。政変の背景を構成する少なくとも一つの要素は、これまで述べた36年の農業不振にあったと考えてよい。北部＝ドン管区をめぐる事態がこのことを示唆する。

36年、アゾフ＝黒海地方の経済はすべての指標において「急激に悪化」した<sup>108)</sup>。農業も例外でなく、最も重要な課題の一つであった単位収量向上の計画目標は不達成に終わった。すでに指摘したように、旱魃の結果、同地方の収穫は「いくつかの地区で」予想を大きく下回る不作となった<sup>109)</sup>。ラーリンによれば、穀物は計画の10.7ツェントネルに対し9.7ツェントネル、とうもろこしは特に悪く、18ツェントネルの目標に対し8.1ツェントネル、ひまわりは8.9ツェントネルに対し5.5ツェントネルの単位収量であった<sup>110)</sup>。クバン諸地区と比較して、平均3～4ツェントネル収穫の低い北部＝ドン管区が、この点で地方全体の足を引張ったのであった<sup>111)</sup>。

1月21日、『プラウダ』と『イズヴェスチヤ』は北部＝ドン管区を廃止するという全露中央執行委員会幹部会決定を発表した<sup>112)</sup>。エヴドキーモフは2月、スタハーノフ運動農業活動家地方大会の席上、この決定を取り上げ簡単な説明を加えた。それによれば、管区廃止は「地区とコルホーズに地方組織がより緊密に接し」、それらに「適時に援助を与える」ことを可能ならしめる措置であった。彼は管区の農業生産がクバン諸地区よりも遅れているのは「不可解」であると述べて、管区指導部に対する不信任を表明した。管区は「片足をひきずって歩いて」おり、地方指導部からの直接の援助が不可欠な状態にあったとされた。そして彼は、この決定から必要な教訓を引き出すよう農業活動家に強く求め、管区廃止が農業生産の失敗に対する制裁、警告措置であったことを示唆した<sup>113)</sup>。後にカシーロフら旧管区指導者が「人民の敵」として断罪されていることを考慮すれば、管区廃止に関連して管区指導部の粛清が実施されたことは推測に難くない。

このエヴドキーモフ報告を受けた農業活動家大会は、北部＝ドン管区を含むドン川流域の土地が肥沃でないという見解を誤りとして斥け、クバンと同様の高い収穫が可能であるとの特別のアピールを発した<sup>114)</sup>。このことは、アゾフ＝黒海地方の農業にとって、ドン川流域の遅れが重大な意味をもっていたことを示すといつてよい。これまで北部＝ドン管区では、単位収量が秋播き小麦よりも相対的に劣るライ麦が中心的作物として位置づけられてきたという。36年、管区の秋播き計画によれば、播種面積39万ヘクタールのうち小麦は7万8000ヘクタールにすぎなかった。これは35年の2倍以上ではあるが、依然として低すぎる比重であった。ある論者によれば、かかる事態は「父と祖父の経験」が農業機関と管区指導部の保守性のもとで、なお生命力を保っているからにはほかならなかった<sup>115)</sup>。播種する作物の選定に政治的意義を見出すこうした論理からすれば、管区廃止と指導部粛清の後、単位収量向上に向けて強制的な作物の転換が図られたであろうことは、十分推測できよう。

6月に開催された第2回地方党協議会において、エヴドキーモフは北部＝ドン管区に

おける農業と政変とのより直接的な関連を明らかにした。それによれば、党中央委員会は36年、単位収量向上の課題で特に遅れている北部＝ドン管区について二つの「特別な決定」を下した。それらはシェボルダーエフとラーリンに対して、収穫増大の「決定を達成しなかった場合、指導部からの解任を含む厳しい処分を党中央委員会は科す」と警告した。しかし彼らは、ルーキン、カシーロフら管区指導部の「挑発的政策」にも「指一本動かさなかった」というのであった<sup>116)</sup>。これらの決定は公表されておらず、我々はその詳細な内容を今のところ知りえないが、エヴドキーモフの発言から判断する限り、36年の農業カンパニアの失敗が、シェボルダーエフ失脚と管区廃止をもたらした重要な一つの要因であったことは、まず間違いないところであろう。

党協議会への報告のなかでさらにエヴドキーモフは、旧指導部のもとで採られた農業政策に全面的な批判を加えた。もちろん、粛清された者に対する当時の非難のなされ方を考えれば、非難のすべてを額面どおり受け取るわけにはいかない。そこではあらゆる口実を考え出して非難することが、現体制の正当性とそれへの忠誠の証となるからである。しかしながら同時に、それらをすべて虚偽ないし捏造として片付けることもできない。そこには現体制にとって肯定しえない不首尾な事態が何らかの形で反映されているからである。この意味でエヴドキーモフの議論は注目すべき点を含んでいる。

彼の非難の矛先は36年8月の地方党委員会第6回総会決定に向けられた。総会は単位収量向上という最も重要な課題を討議したが、彼によれば、そこで主導権を握ったのは後に「人民の敵」として摘発された農業管理局長オディンツォーフであった。シェボルダーエフは宣言的な演説を行なっただけで、オディンツォーフの「思いつき」をまったく統制しなかった。その結果、「いわゆる『三ヵ年計画』なる文書」が発せられるに至った。エヴドキーモフは、旧指導部がこれを「国家五ヵ年計画に対置した」と強弁して、彼らを激しく非難したのである<sup>117)</sup>。

この三ヵ年計画とは前節で述べた植林三ヵ年計画を指すが、それは植林事業だけに留まらず、その執行過程において、他の産業分野にも小さからぬ影響を及ぼす指令を伴った。たとえば特定の地区に対しては、森林の伐採に歯止めがかけられ、製材業から他への転換が指示された。激しい旧指導部批判が展開された党協議会での討論において、ある地区の指導者は、製材業を重要産業とする地区の実情を無視して、陶器製造への移行が三ヵ年計画によって指令されたと、その憤りをぶつけた<sup>118)</sup>。

一層重大な問題は、植林がノルマ達成のため、地区によっては放牧地などにも強要されたことであった。旧北部＝ドン管区のペロ・カリトヴェンスク地区では、植林のためにコルホーズは「すべての干草用牧草地、すべての放牧地を明け渡さねばならなかった」。多くの地区委員会が牧草地への植林を批判したが、オディンツォーフらはそれを強引に押し通したというのであった<sup>119)</sup>。「破壊分子」の目標は「放牧地、干草用牧草地の根絶」に置かれたとも言われた<sup>120)</sup>。

この点は当時の飼料不足と関連して、旧指導部による畜産に対する破壊活動の表れと捉えられた。「敵は家畜を飼料なしの状態に置き、畜産を破滅させようとした」というのである<sup>121)</sup>。旱魃の結果、36年から翌年にかけての冬、多くの地方で深刻な飼料不足がみられたことはすでに指摘したとおりである。35年から36年にかけて、畜産はかつてのドン底状態を脱し、緩慢ではあれ着実な発展を遂げつつあった<sup>122)</sup>。その結果、飼料

の確保という課題は以前にまして切実な関心事となっていた。当時奨励されていた牧草輪作制（畑に定期的にクローバーやウマゴヤシなどの牧草を播いて、土壌の肥沃度を高める方法）も、単に穀物のみならず、家畜用飼料の増産にとっても重要な意義をもつと位置づけられていたのである<sup>123)</sup>。

しかし家畜頭数の増大は逆に、一旦飼料不足が生じた場合、重大な結果がもたらされかねないことをも意味する。そしてこの危険は現実となって現れた。エヴドキーモフが明らかにしたところによれば、36年から37年にかけて、抵抗力のない子供の家畜のみならず、成長した家畜もその著しい部分が死亡した。これらはすべて、旧指導部のもとの「飼料確保に対する多くの地区の明らさまに犯罪的な対応の結果」と説明された。特に粗飼料の不足について彼は、オディンツォーフの指示によって脱穀後のワラが焼かれたことにその原因を求め、旧指導部の「破壊活動」に飼料不足と家畜の大量死の全責任を転嫁したのである<sup>124)</sup>。

三ヵ年計画は党協議会決定によって正式に廃棄された。決定によれば、この計画には「破壊活動のあらゆる要素が含まれていた」。「国家五ヵ年計画に対置された三ヵ年計画の実施は、干草用地と放牧地の巨大な縮小をもたらし、それにより畜産の飼料基地を掘り崩した」と、協議会は断じた<sup>125)</sup>。一旦は中央の承認を得た植林計画は、36年冬の飼料危機を契機として、今や断罪されるに至ったのである。

以上のように、新指導部による非難は畜産を含め、農業政策全般に及んだ。単位収量向上をめざした独自の政策としてシェボルダーエフ指導部が力を注いだ植林事業は、具体的成果をみることなく厳しい批判を浴びた。それはすでにみたように、中央が重要視した秋耕などの秋の農作業と時期を同じくしたため、実践上矛盾する結果となったのである。事実、秋耕目標そのものは達成されたとはいえ、中央が強く求めた期限内の早期の秋耕という点では失敗に終わった。中央の認識によれば、9月中から早期に耕すことによって、より多くの水分を土壌に確保できるはずであった。11月という遅い時期の秋耕の場合、9月のそれに比し20～30%、また10月のそれに比し10%程度収穫が低くなると考えられていた<sup>126)</sup>。かかる認識からすれば、早期の秋耕の失敗は厳しく批判されるべき事態であった。しかも北部＝ドン管区においては、刈り入れ後の畑の耕耘などの課題も達成されなかった。かくて、旧シェボルダーエフ指導部は、一旦はコンバインによる取り入れや穀物調達での成功を祝された<sup>127)</sup>ものの、37年には、農業におけるあらゆる不首尾の責任を負わされることとなったのである。

ただし、ここで指摘しておかねばならないことは、シェボルダーエフ解任に至る背景には、これまで論じた農業問題のほかに、なお多くの要素が存在したであろうという点である。その一つは経済問題へのアプローチの仕方に関わる。これは農業に即して言えば次のようになろう。すなわち、単位収量の向上に向けてシェボルダーエフ指導部が重視した政策は、植林事業などのいわばタイム・スパンの長い性格をもつものであった。アゾフ＝黒海地方の農業に関するシェボルダーエフ自身の発言も、各種の農学的措置のほか、もっぱら自然改造事業の重要性を強調していた<sup>128)</sup>。このような主張は、36年夏以後展開された「トロツキスト＝ジノヴィエフ派」の摘発キャンペーン、あるいは党の「政治的＝組織的役割」の強化を声高に求めた37年以降の議論とは対照的ではなかった。後二者の発想によれば、経済の隘路は「敵の破壊活動」の結果であり、それを除去する

ことによってこそ、経済の正常な発展が可能となるはずであった。もちろん36年秋の農業カンパニアの遂行状況が示すように、シェボルダーエフ指導部がこうした論理から免れていたというわけでは決してない。しかし、政治的気象がますますヒステリー化の度を高め、速効的な措置がより強く求められた状況のもとでは、長期的な観点からの政策を相対的に重視する議論は、もはや政治的妥当性を失わざるをえない<sup>129)</sup>。この意味で、旧指導部に投げかけられた「経済活動への埋没」という非難は理由のないことではなかったといえよう。

シェボルダーエフ解任とその後の粛清に関連すると思われる一層重要な要素は、政変直後の『モーロト』社説が指摘した同地方の大都市党組織の「混乱」である<sup>130)</sup>。都市党組織の活動は工業および鉱業の状況と密接に関係するが、当時それが問題とされたのは、直接的には党員証点検・交換カンパニアの「欠陥」との関連においてであった。すでに点検カンパニアの過程で、党中央は36年1月、タガンログ市とロストフ市内の地区を含む17の地区に対し、点検活動の不十分性を指摘して、そこでの党員証交換の開始を禁止していた。37年6月の第2回党協議会でこの問題に触れたエヴドキーモフは、それが地方党委員会に対する「最初の警告」であったと主張した。しかし旧指導部はそれを無視し、党活動の改善に取り組まなかった。その結果、地方の首都ロストフにおいて「最も甚だしい混乱」が生ずるに至ったというのである<sup>131)</sup>。

党中央は36年11月、再度決定を発してロストフ市党組織の活動を非難した。これを承けた同市党組織は、「革命的警戒心の驚くべき麻痺」の結果、ロストフ農業機械工場などの重要企業の指導部に「潜入したトロツキスト、人民の敵」を、長い間、暴露できなかったと自己批判した<sup>132)</sup>。党中央委員会決定後、ロストフ市では大々的な粛清が実施された。この粛清はこれまで以上に厳しく、党員証点検・交換カンパニアの全期間を通じてと同じ数の「トロツキスト」が除名されたという<sup>133)</sup>。こうした事態が同地方の最高指導者シェボルダーエフに対する「政治的近視眼」などという非難に連動し、彼の失脚をもたらす要因となったことは十分推定できよう。

アゾフ＝黒海地方における37年初頭の政変の背景はまだ十分解明されたとはいえない。そこには様々な要因が絡み合っていたとみるべきであろう。ただここでは、これまで示してきたように、36年の農業カンパニアの失敗が旧指導部に対する粛清において重要な意味をもったことを確認すればよい。37年春の播種カンパニアの強権的实施とその過程での一層の粛清の進行<sup>134)</sup>は、農業カンパニアの失敗がもたらした帰結の大きさを、新指導部が生々しい記憶として十分把握し、そこから「教訓」を引き出したことの反映であったともいえよう。エヴドキーモフはすでに春播き開始前から、「春播きの国家計画を我々はどんなことがあっても達成するし、もし必要とあらば、我々は彼ら（地方農業管理局活動家）の頭を越えて行動する」と、その並々ならぬ決意の程を示しており、そして実際、「地方党委員会は直接自らの手に春播きの実践的指導を取り上げ、文字どおりあらゆる細事に取り組んだ」と、誇らしげに語ったのであった<sup>135)</sup>。

シェボルダーエフ失脚の決定的原因が何であったにせよ、旧指導部は工業、農業、党活動など、あらゆる分野での不首尾の責任を追及された。そしてシェボルダーエフという後ろ盾を失った地方指導者は、粛清の高波に為す術もなく呑み込まれていくこととなる。これは同時に、同地方に対する中央集権的支配の一層の強化の過程でもあった。

## おわりに

アゾフ＝黒海地方の農業カンパニアと37年初頭の政変をめぐる以上の検討を踏まえ、我々は冒頭で提示した二つの仮説について、暫定的ではあるにせよ、以下を結論として導き出すことができよう。第一は37年以降の大テロルの高潮と36年の農業不振との関連についてである。

37年初頭、粛清の舞台となったのはアゾフ＝黒海地方だけではなく、それは次に述べるように全国に及んだ。このことは、36年農業の全国的な凶作が決定的とはいえないまでも、粛清の重要な背景をなしたことを示唆する。すでに指摘したように、36年における穀物の総収穫高は、信頼しうる西側経済史家の推計によれば、前年よりも2000万トン近く少ない5610万トンであった。これは、3～4年以内に達成するようスターリンが指示した70～80億ブード（約1億1000万～1億3000万トン）の半分にしか達しない惨めな成績であった。換言すれば、スターリンの呼びかけはその実施の初年度において早くも打ち碎かれたのであった。

全国の農業機関の指導者に対する粛清はこれへの報復という意味をもったといえよう。37年春までに、アゾフ＝黒海地方のほか、農業生産の失敗が著しかったといわれるクルスク、オデッサ、ハリコフ、オムスクなど一連の州で、農業管理局の指導的活動家が「トロツキスト」、「右翼反革命分子」として摘発された。ソフホーズ系列でも多くの指導者が追放された<sup>136)</sup>。党委員会第一書記をはじめ、指導部の主要構成員のほとんどが党中央から厳しく非難されたキルギジアでも、攻撃の主たる矛先の一つは、ソフホーズ指導者、州党委員会農業部長および農業人民委員など、農業活動家に向けられた<sup>137)</sup>。アゾフ＝黒海地方と同様、党第一書記の解任という事態を伴ったクルスク州では、党中央委員会農業部長ヤーコヴレフが現地にのりこんで粛清の実施と州党委員会総会を直接指揮した。総会の席で彼が説明した第一書記解任の理由の一つは、コルホーズにおける混乱と農業管理局での「破壊活動」にあった<sup>138)</sup>。

もちろん、個々の地方における粛清には独自の要因が存在するであろう。それゆえ、個別の分析を俟たずしてそれらを一概に扱うことは、早計との謗りを招くかもしれない。しかしすでに述べたように、クルスクやオデッサは36年農業カンパニアにおいて深刻な問題を抱えた地方であり、そこでの農業活動家に対する粛清がその責任追及としてなされたであろうことは、十分推測してよいであろう。アゾフ＝黒海地方における農業政策の失敗とその帰結、さらにここで挙げた地方での粛清と第1節で概観した農業カンパニアの遂行状況から考えれば、37年の大規模なテロルの一つの引き金となったのは、スターリンの期待を裏切った36年農業カンパニアの失敗であったと、結論しても差し支えないように思われる。

結論の第二は、スターリン体制下の農村支配の方式に関連する。36～37年のアゾフ＝黒海地方における政治過程を検討した結果、我々は30年代における農村支配の方式に、あるいは換言すれば一種の危機管理の方式に、一つのパターンともいえるべき重要な特徴を見出すことができる。それは、現在のソ連で頻繁に使われている用語によれば、行政的＝官僚的方法、あるいは行政的＝抑圧的方法ということになろう。ただし、その「行政的」という語には、後に述べる特殊な意味が込められねばならない。

1920年代末から30年代前半の時期における農村支配の様相については、すでにいくつかの研究がその基本的な諸特徴を明らかにしている。それによれば、当時の農村をめぐる政治過程を根本的に規定したのは、集団化あるいは穀物調達など、農業カンパニアの適時の達成という絶対の課題と、農民の自発的意思との矛盾、そして党中央と農民の間において、農民に圧力を加えながらも課題を容易に達成できない地方権力機関（村および地区、さらに場合によっては州・地方<sup>クラ</sup>レベルも含まれる）という政治的構図であった。したがって、農村統治の中心的方法の一つは暴力による直接的支配とならざるをえない。「クラーク」の観念が政治化したもとで、暴力は広範な層の農民を襲い、いわば危機対処策としての非常措置は常態化する。さらに暴力と威嚇は農民のみならず、中央の眼からみて課題達成に取り組まない現地活動家にも向けられる。都市から全権代表が派遣され、彼らの指導のもとに、正規の権力機関とは別に臨時の権力機関、トロイカ、本部などが組織される。そしてあらゆるレベルで粛清が強行される<sup>139)</sup>。

こうした政治的構図と農村支配の方法は、もちろんその時々での重要な特殊性をもつ<sup>140)</sup>とはいえ、本稿が扱った36年においても基本的な相違はない。ただ、ここで結論として特に強調しておかねばならない点は、スターリン体制下のもとでの危機管理策の一環として、農村における何らかの危機が強行的に突破された後、農村に対する一元的支配を強化するために、いずれの場合においても行政区画が再編されているということである。

すなわち30年7月には、州・地方と地区の間の中間階梯である管区が一部の例外を除いて廃止された<sup>141)</sup>。管区廃止は、この時期の集団化をめぐる政治過程を実証的に検討した代表的研究によれば、30年3月から4月にかけて集団化運動が昏迷を深める過程で現出した全権代表システムの危機、換言すれば農村における党の指導権の危機に対する対策として、地区に対する中央集権的支配を一層強化するための措置であった<sup>142)</sup>。32年から33年にかけての穀物調達危機と飢饉を強行的にのりきった後の34年には、大地区が分割され、700近い地区が新たに創出された。これは、その間のMTC政治部の活動を踏まえ、MTCを地区編成の基礎とすることによって、農村の末端に対する地区の政治的掌握力を高めようとした試みであった。地区分割に対応して下位の行政単位である村ソヴェトも細分化された。特に注目すべきは、この間、穀物調達などの農業カンパニアで大きな困難を抱えた北カフカース、中流・下流ヴォルガ、ウラル、中央黒土州が分割されたことである<sup>143)</sup>。

36年の農業不振を経た37年にも、まったく同様に行政区画の再編が実施された。まず、単位収量の向上という課題で重大な遅れをとった北部＝ドン管区が廃止された。これが管区指導者と農業活動家に対する制裁、警告措置であるとともに、30年の管区廃止と同様、地方指導部が直接地区とコルホーズを把捉する目的をもつものであったことはすでにみたとおりである。次いで37年9月には、アゾフ＝黒海地方自体が34年に続いて再度二つに分割された。これを皮切りに、行政区画の再編ラッシュとでも呼ぶべき状況が現出した。ハリコフ、キエフ、ヴィンニツァ、オデッサ、東シベリア、西部、クルスク、ヴォロネジの各州と西シベリア地方など、36年の穀物生産と農業カンパニアで失敗に至る大きな困難を抱え、厳しい叱責を受けた一連の地方が、二つに分割され、あるいは領域を他の地方に割譲されたのである<sup>144)</sup>。

再編の結果、それらの地方は領域を大幅に縮小し、それにもなって地方指導者の権力基盤も削減された。これは中央の期待を裏切った地方指導者に対する懲罰の意味をもったであろう。同時にそれは、中間階梯を細分化することにより、中央から農村の末端に至る集権的支配をより効率的ならしめる措置であったといえよう。行政区画の再編は、全国の地方指導部を巻き込んで進行した大規模なテロルと相俟って、中央からの一元的な支配、統制を一層強化することとなった。先に、行政的＝抑圧的方法なる用語に特殊な意味を込めるべきであると留保したのは、スターリン体制下における農村支配の方式を特徴づけるうえで、こうした行政区画再編による事後的な危機管理策がその不可欠の要素をなすと考えるからである。

—注—

- 1) *Известия*, 14 января 1934 г., стр. 1. 分割の結果, 北カフカーズとアゾフ=黒海地方が生まれたが, クバンやドンなどの穀物地域はアゾフ=黒海地方に編入された。
- 2) *Там же*, 13 сентября 1937 г., стр. 1.
- 3) たとえば, 下斗米伸夫「クバン事件 (1932) 覚書き」『成蹊法学』18~19号; 同「コルホーズ体制の危機と政治部の導入」溪内謙編『ソヴィエト政治秩序の形成過程』岩波, 1984年; 富田武「穀物調達とコルホーズ」『歴史学研究』1982年6月号; 拙稿「スターリン体制下の農村における統治体制の再編」『スラヴ研究』29号を参照。
- 4) 下流ヴォルガ地方がサラトフ地方とスターリングラード地方に, ウラル州がスヴェルドロフ州, チェリャビンスク州, オブスコ=イルトゥイシ州に, 中央黒土州がヴォロネジ州とクルスク州に, さらに中流ヴォルガ地方が中流ヴォルガとオレンブルグ州に分割された。それぞれ, *Собрание узаконений и распоряжений РСФСР*, 1934, No.5, стр. 34, 35; No. 26, стр. 153; 1935, No. 4, стр. 45.
- 5) *Правда*, 19–24 августа 1936 г. ドニエプロペトロフスク州やハリコフ州など, いくつかの州党委員会の指導者をはじめ, 一連の市と工場の党指導部が「警戒心の麻痺」を厳しく非難された。とくに, サラトフ地方での肅清は地方党委員会宣伝=煽動部長など, 地方指導部にまで及んだ。*Там же*, 26 августа 1936 г., 社説; 16 сентября, стр. 4.
- 6) *Там же*, 20–30 января 1937 г.
- 7) *Там же*, 19 февраля 1937 г.; A. ラーリナ, 和田あき子訳『夫ブハーリンの思い出』下, 岩波, 1990年, 262–3頁。
- 8) すでに36年8月以降, 「俗物的保身」の目的から, 根拠のない非難が数多くなされはじめたことは指導部も認めるところであった。たとえば, *Молот*, 20 сентября 1936 г., стр. 3 参照。
- 9) 大テロル期の農村については, 西部州 (37年, スモレンスク州に改称) ベールィ地区を扱った R. T. Manning, "Government in the Soviet Countryside in the Stalinist Thirties: The Case of Belyi Raion in 1937," *The Carl Beck Papers in Russian and East European Studies*, Paper No. 301, 1984 があるが, 36~37年の農業カンパニアについてはほとんど触れていない。36年穀物調達への彼女の数少ない言及は, 後に紹介する。注29) 参照。また, 大テロルを35~36年の党員証点検・交換カンパニアとの関連で分析し, 大テロルにおける「人民主義的」要素を析出した研究として, J. Arch Getty, *Origins of the Great Purges: The Soviet Communist Party Reconsidered, 1933-1938*, Cambridge U. P., 1985 がある。ゲッティは, 大テロルを34年12月のキーロフ殺害から始まるスターリンの計画的産物とみることに反対しているが, この点では筆者も同じ見解である。スターリンの猜疑心などを問題とする場合においても, それは当時の国際・国内情勢との関連で扱わねばならないであろう。大テロルの検討にとって, 36年以降の社会的経済的状況 (農村と農業のみならず, 都市と工業をも含めた) の分析は不可欠であると考ええる。
- 10) A. ノーヴ, 石井他訳『ソ連経済史』岩波, 1982年, 282頁。
- 11) *Правда*, 16 августа 1936 г., стр. 2 (クリミア); 26 августа, стр. 1 (アゾフ=黒海地方); 2 октября, стр. 2 (ウクライナ)。
- 12) たとえば, *там же*, 16 декабря 1936 г., стр. 2; 31 декабря, 社説。
- 13) *Колхозный путь* (アゾフ=黒海地方党委員会機関誌), 1936, No. 6, стр. 61. 全国的にも5~6月の降水量は35年と「鋭く違う」と指摘された。*Социалистическая реконструкция сельского хозяйства*, 1937, No. 1, стр. 106.
- 14) *Социалистическая реконструкция сельского хозяйства*, 1937, No.1 стр. 106.
- 15) *Правда*, 30 марта 1937 г., стр. 1.
- 16) *Там же*, 21 марта 1937 г., стр. 1; M. A. Вылцан, *Завершающий этап создания колхозного строя (1935–1937 гг.)*. М., 1978, стр. 162. さらにヴィルトツェンはアルヒーフ資料を引いて, 37年12月, ウズベクやアゼルバイジャンなどの民族共和国のコルホーズに対して, МТС<sup>ムルタツキ</sup>の作業に対する現物支払いの36年までの未納分と, クルスク, オリョール州のコルホーズに対して36年の現物支払いの未納分の, 帳消し措置がそれぞれとられたと指摘している。*Там же*, стр. 162–163.

- 17) *Коммунист* (クイブイシエフ地方党委員会機関誌), 1936, No. 24, стр. 6.
- 18) *Там же*.
- 19) *Партиец* (西部州党委員会機関誌), 1937, No. 4, стр. 16.
- 20) *Правда*, 8 августа 1936 г., стр. 2.
- 21) *Партиец*, 1936, No. 9, стр. 47.
- 22) 州全体で、大型有角家畜が8月に3700頭、9月に4700頭、10月には7400頭屠殺されたと報告された。*Правда*, 20 декабря, 1936 г., стр. 4. ただし同州ではブルセラ症が流行しており、大量屠殺を単に飼料不足だけから説明することはできない。全露中央執行委員会ヤロスラーヴリ州組織委員会は、ブルセラ症の家畜を家畜調達委員会に屠殺用として引き渡すよう決定したが、この決定は党と政府によって取り消された。*Там же*, 27 декабря 1936 г., стр. 1.
- 23) *Колхозная товарная ферма*, 1936, No. 16, стр. 22–23 ; No. 19, стр.1.
- 24) *Правда*, 3 января 1937 г., стр. 4.
- 25) Вылцан, *Указ. соч.*, стр. 162 ; *Правда*, 17 мая 1937 г., стр. 3.
- 26) *Правда*, 24 февраля 1937 г., стр. 3.
- 27) *Известия*, 22 марта 1937 г., 社説。同社説は春播種開始にあたって、そのような革命的合法性の侵犯を繰り返してはならないとして、今後、「裁判所を通じて検察官だけ」が責任を問うると強調した。
- 28) *Социалистическое земледелие*, 12 сентября 1936 г., 社説 ; *Правда*, 27 февраля 1937 г., 社説。それぞれ西シベリアとクラスノヤルスクにおける事態である。両地方とも穀物調達問題で強い非難を浴びたが、同『プラウダ』社説によれば、経営が混乱し収穫が低いコルホーズでこそ、議長の特断的任免など、コルホーズ定款の侵犯がみられたという。
- 29) Manning, *op. cit.*, p. 34.
- 30) *Правда*, 15 февраля 1937 г., стр. 2.
- 31) *Там же*, 4 июля 1936 г., стр. 3.
- 32) *Там же*.
- 33) *Коммунист* (西シベリア地方党委員会機関誌), 1936, No.6–7, стр. 55. 食肉供出で成績の悪い管理者＝党員への党員証発行を禁止したゴーリキー地方党委員会決定を、「逸脱」として批判した5月23日付党中央委員会決定(*Правда*, 24 мая 1936 г., стр. 1)の後も、党員証交換を経済カンパニア遂行のための手段とする試みが、なお多くの地方でみられたという。
- 34) たとえば、党からの除名者に対する解雇命令を取り消した党中央委員会決定(*Правда*, 22 ноября 1936 г., стр. 1) 参照。これとは逆に、除名者を直ちに要職から解任しなかった「自由主義的態度」と「形式民主主義への拝跪」に対する非難については、*Молот*, 14 августа 1936 г., 社説参照。粛清が一層激しさを増した37年春以降の議論ではあるが、西シベリア地方第一書記エイヘによれば、「党からの除名者はしばしば敵として扱われている。……いく人かの経済活動家は保身を考えて、除名者を雇おうとしない」状況であった。*Коммунист* (西シベリア), 1937, No.9–10, стр. 14.
- 35) *Правда*, 31 августа 1936 г., стр. 2.
- 36) *Социалистическое земледелие*, 3 сентября 1936 г., 社説。
- 37) *Там же*, 6 сентября 1936 г., 社説。
- 38) *Правда*, 5 сентября 1936 г., стр. 3. 8月末の時点で、穀物取り入れは昨年と同時期の半分にしかなかった。脱穀も刈り取り分の30%に満たないと非難された。
- 39) *Социалистическое земледелие*, 4 сентября 1936 г., стр. 1.
- 40) *Коммунист* (西シベリア), 1936, No. 11, стр. 30–31.
- 41) *Там же*, стр. 33.
- 42) *Там же*, стр. 31 ; 1937, No.11, стр. 42.
- 43) *Там же*, 1937, No.2–3, стр. 44.
- 44) それぞれ, *Правда*, 15 октября 1936 г., стр. 1; 18 октября, стр. 1 ; 26 ноября, стр. 6 ; 13 декабря, стр. 1.
- 45) *Партиец*, 1936, No. 12, стр. 3–4.
- 46) それぞれ, *Правда*, 8 января 1937 г., стр. 1 ; 30 января, стр. 1 ; 17 февраля, стр. 1. なお,

その他の主要地方については、*там же*, 15 ноября 1936 г., стр. 1 (クリミア, ドニエプロベトロフスク州など); 23 ноября, стр. 1 (ヴィンニツァ, オデッサ州など); 10 декабря, стр. 1 (アゾフ=黒海地方, ハリコフ州など)を参照。ただし,すでに指摘したように,いくつかの地方が春播き用種子の国家援助を受けていることから考えると,穀物販売許可の二つの条件は実際には満たされなかったとみるべきであろう。

- 47) *Там же*, 31 мая 1936 г., стр. 2.
- 48) *Социалистическая реконструкция сельского хозяйства*, 1937, No.5, стр. 149.
- 49) *Правда*, 23 октября 1936 г., 社説。ちなみに, コサックの赤軍勤務に対する制限が撤廃され, コサック騎兵部隊の復活が決定されたのは, この年の4月であった。*Там же*, 21 апреля 1936 г., стр. 1.
- 50) *Там же*, 4 октября 1936 г., стр. 3.
- 51) *Там же*, 4 октября 1936 г., стр. 3; 23 октября, стр. 3.
- 52) *Молот*, 10 октября 1936 г., стр. 1.
- 53) *Там же*, 14 октября 1936 г., стр. 2.
- 54) *Там же*, 16 октября 1936 г., стр. 1.
- 55) *Там же*, 30 октября 1936 г., 社説。
- 56) *Там же*, 24 октября 1936 г., стр. 1.
- 57) *Правда*, 25 октября 1936 г., 社説。
- 58) *Там же*, 3 октября 1936 г., стр. 4.
- 59) *Там же*, 7 октября 1936 г., стр. 3.
- 60) *Там же*, 17 октября 1936 г., стр. 4.
- 61) *Там же*, 14 октября 1936 г., стр. 3.
- 62) *Там же*, 29 сентября 1936 г., стр. 3; 14 октября, стр. 3. 36年秋の農業カンパニアに対するソフホーズ人民委員部の「指導の欠如」は, 翌年2月の機構改革の原因の一つとなったと思われる。機構改革についての政府決定は, *там же*, 16 февраля 1937 г., стр. 3 参照。
- 63) *Там же*, 10 октября 1936 г., стр. 4; 25 октября, 社説。
- 64) *Там же*, 17 октября 1936 г., стр. 4; 25 октября, 社説。
- 65) *Там же*, 25 октября 1936 г., 社説。
- 66) *Там же*, 17 октября 1936 г., стр. 4; 25 октября, 社説。同地方ではとくにトラクター利用が低い水準にあると言われた。*Молот*, 27 сентября 1936 г., стр. 2.
- 67) *Правда*, 25 октября 1936 г., 社説。
- 68) *Там же*, 14 августа 1936 г., стр. 6.
- 69) *Молот*, 1 ноября 1936 г., стр. 2; 4 ноября, стр. 1.
- 70) *Там же*, 1 ноября 1936 г., стр. 2; 5 ноября, стр. 2.
- 71) *Там же*, 10 ноября 1936 г., стр. 4.
- 72) *Там же*, 30 декабря 1936 г., стр. 2. 11人のコルホーズ議長を含む25人の活動家が嚴重注意などの処分を受けた。これらの処分はカンパニア終了後, 党処分のもつ「政治的意義」を無視した「形式的=官僚的方法」と逆に非難された。
- 73) *Там же*; *Колхозный путь*, 1937, No.2 (10), стр. 6.
- 74) *Молот*, 27 ноября 1936 г., стр. 1.
- 75) *Правда*, 31 мая 1936 г., стр. 2. この論文で彼は灌漑事業以上に防風林の意義を強調している。
- 76) *КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК*, т. 5, М., 1984, стр. 438. ただし, 非黒土地帯 (モスクワ, レニングラード, 西部州など) とクルスク州北部およびクイブイシュフ地方右岸地域については, 35年12月, 新たな土地の開墾が指示された。*Правда*, 20 декабря 1935 г., стр. 1. 35年から37年にかけての全国での播種面積の増加については, *Вылцан. Указ. соч.*, стр. 134 参照。
- 77) *Правда*, 4 декабря 1935 г., стр. 1.
- 78) *Там же*, 5 декабря 1935 г., 社説。たとえば, 西部州ではこのスローガンのもとに, 36年に単位収量を40%向上させる目標が立てられた。*Партнец*, 1936, No. 1, стр. 15.
- 79) *Вылцан. Указ. соч.*, стр. 138. アルヒーフを引用。なお, 当時は全国平均, 10ツェントネルの

- 穀物単位収量を達成したと言われた。*Правда*, 5 декабря 1935 г., 社説。秋播き小麦はアゾフ＝黒海地方を例にとると、春播き小麦より25%程多い単位収量を与えた。*Колхозный путь*, 1936, No. 1, стр. 4.
- 80) *Колхозный путь*, 1936, No. 1, стр. 3-4, 9.
- 81) *Правда*, 16 января 1936 г., стр. 4.
- 82) *Там же*, 31 мая 1936 г., стр. 2. その後、当初の計画に地方南東部のクバンをも含めるよう求めた要求が提起され (*Молот*, 5 августа 1936 г., стр. 2), それは受け入れられた。
- 83) *Молот*, 1 сентября 1936 г., стр. 2.
- 84) *Там же*, 10 июля 1936 г., с. 2.
- 85) すでに述べたように、同地方の秋耕期限は10月20日であった。注68) 参照。
- 86) とうもろこしの取り入れは特に遅れ、とうもろこしを含む全穀物の供出計画はなかなか達成されなかった。*Молот*, 24 сентября 1936 г., 社説; 4 октября, стр. 1. 地方指導部は、とうもろこし取り入れの効率を上げるため、ピッカー (пиккер) と呼ばれるとうもろこし摘み機の活用を求め、それに消極的な者を「反機械化分子」と非難する大々的なキャンペーンを展開した。
- 87) *Там же*, 27 августа 1936 г., 社説。
- 88) *Там же*, 10 июля 1936 г., стр. 2.
- 89) たとえば、同管区では「許しがたく呑気な気分」が支配的であると非難された。*Там же*, 27 августа 1936 г., 社説。この外、同管区への非難については、*там же*, 21 августа 1936 г., стр.1; 29 августа, стр. 2; 6 сентября, 社説; 20 сентября, стр. 3; 26 сентября, стр. 3 参照。なお、北部＝ドン管区とならんで最も厳しく断罪されたのは中流ドン地域であり、それらの地区は、指導部の「日和見主義的態度と稀にみる無責任」により、「地方で最も遅れた地域に属する」と言われた。*Там же*, 17 сентября 1936 г., стр. 2.
- 90) *Там же*, 3 октября 1936 г., стр. 3.
- 91) *Там же*, 8 сентября 1936 г., стр. 3. もっとも、秋耕においてもすでに述べたように、トラクターの利用が悪いと一貫して非難されていた。
- 92) *Там же*, 10 ноября 1936 г., стр. 4.
- 93) *Там же*, 17 ноября 1936 г., стр. 1.
- 94) 刈り入れ後の畑の耕起は11月中旬で約80%の遂行に留まっていた。*Там же*, 15 ноября 1936 г., стр. 3.
- 95) *Там же*.
- 96) *Там же*, 16 ноября 1936 г., 社説。
- 97) たとえば、*там же*, 30 октября 1936 г., 社説。地方農業管理局の「実務的指導の欠如」に関する同局長オディンツォーフの自己批判については、*там же*, 1 ноября 1936 г., стр. 2 参照。
- 98) この決定は公表されず、その後のいくつかの言及によって内容を推測しうるに留まる。引用符中の「政治的近視眼」云々は、37年6月に開かれた第2回地方党協議会におけるエヴドキーモフ報告中の言葉である。*Там же*, 14 июня 1937 г., стр. 3. 決定のタイトルについては、*там же*, 22 марта 1937 г., стр. 2 参照。
- 99) 1月8日付『モーロト』は一面トップで、「1月6～7日、アゾフ＝黒海地方党委員会総会が開催された。党中央委員会決定に関連して、総会はシェボルダーエフ同志を地方党委員会第一書記から解任し、エヴドキーモフ同志をアゾフ＝黒海地方党委員会第一書記に選出した」と、総会についてごく簡単に伝えた。
- 100) *Молот*, 14 июня 1937 г., стр. 3-4. 総会后、ベレジンはクラスノダール市党委員会第一書記に、マリノフは地方農業管理局に異動した。それぞれの役職については、*там же*, 16 марта 1937 г., стр. 3; 24 марта, стр. 1 参照。
- 101) ラーリンが難を免れ、ベレジンらも批判されたとはいえ要職に就いていること (前注参照)、エヴドキーモフが第2回地方党協議会で、党中央委員会決定によるシェボルダーエフ解任と地方党委員会1月総会におけるベレジン、マリノフ批判とを区別してそれぞれに言及していること (注98) 参照)、さらに注99) で紹介した総会についてのコミュニケの報じ方から推測すると、党中央委員会決定は具体的措置としてシェボルダーエフの解任だけを定めたと思われる。
- 102) 37年6月の第2回地方党協議会の席上、シェボルダーエフに対するこれまでの政治的評価を変更

- するよう求める意見が、多くの代議員から提出された。*Молот*, 14 июня 1937 г., стр. 5 ; 15 июня, стр.3.
- 103) コムソモール中央委員会書記コーサレフが同地方にのりこみ、エヴドキーモフとともに、コムソモール中央委員会決定の実施と同地方委員会拡大総会の開催を主導した。旧指導部に対する最大の非難は「政治的教育活動の破壊」であった。決定がコムソモール活動家の間にパニックを惹き起こしたことは、コーサレフの演説から窺い知ることができる。*Там же*, 5 февраля 1937 г., 社説 ; 6 февраля, стр. 2 ; 14 февраля, стр. 2.
- 104) *Там же*, 14 июня 1937 г., стр. 3-4.
- 105) *Там же*, 8 января 1937 г., стр. 1.
- 106) たとえば, *Правда*, 6 февраля 1937 г., 社説 ; 8 февраля, 社説参照。
- 107) 総会決定については, *КПСС в резолюциях ...*, т. 6, М., 1985, стр. 378-384 参照。総会後の「経済活動への熱中」批判は, たとえば, *Правда*, 9 марта 1937 г., 社説参照。総会決定は特にアゾフ=黒海地方とキエフ州を名指しして, 党規約と党内民主主義の侵犯の責で強く批判した。決定が強調した批判の保障や党機関の選挙制などの「党内民主主義」の原則は, 中間階梯に位置する地区, さらに州・地方指導者に対する粛清の際, 大いに活用された。この点に注目して, ゲッティはいわゆる大テロルのなかに, 政治秩序の頂点に立つスターリンら最高指導者が, 末端の党員と直接結びつこうとした「反官僚主義的人民主義」の要素があったことを強調している。*Getty, op. cit.*, pp. 91, 170-171, 206.
- 108) *Молот*, 14 июня 1937 г., стр. 3.
- 109) 注48)。
- 110) *Молот*, 14 февраля 1937 г., стр. 1.
- 111) 注80) 参照。北部=ドン管区と中流ドン地域は「毎年低い収穫を与え, それによって地方の平均単位収量を引き下げている」と言われた。*Правда*, 4 июля 1936 г., стр. 2.
- 112) 同日付『モーロト』もタス通信として論評抜きでこの決定を報じた(4頁)。
- 113) *Колхозный путь*, 1937, No. 2, стр. 9. これより省略の多い演説要旨が, *Молот*, 18 февраля 1937 г., стр. 1-2 にある。
- 114) *Молот*, 24 февраля 1937 г., приложение.
- 115) *Там же*, 27 августа 1936 г., стр. 2. ライ麦の平均単位収量はアゾフ=黒海地方全体で, 秋播き小麦の8.4ツェントネルに対し5.8ツェントネルであったという。*Колхозный путь*, 1936, No. 1, стр. 3.
- 116) *Молот*, 14 июня 1937 г., стр. 4.
- 117) *Там же*, стр. 3.
- 118) *Там же*, 17 июня 1937 г., стр. 3.
- 119) *Там же*, 14 июня 1937 г., стр. 5. この発言を前提とすれば, 植林計画, とりわけ北部=ドン管区におけるその不達成は, 現地活動家とコルホーズ員の抵抗を反映したとみることができる。
- 120) *Там же*, 15 июня 1937 г., стр. 2.
- 121) *Там же*, 14 июня 1937 г., стр. 5.
- 122) 36年6月に21の州・地方で実施された家畜頭数調査の予備的集計結果によれば, 「すべての種類の家畜が増加した」という。大型有角家畜は15%以上の増加で, 34年に著しい減少をみた雌牛も10%近い伸びを示した。34年まで減少の一途を辿った馬も36年には5%の増加となった。アゾフ=黒海地方は全国のなかでも, 大型有角家畜と馬の頭数で最高の増加率を記録した地方の一つに数え上げられた。*Правда*, 18 августа 1936 г., стр. 6.
- 123) たとえば, *там же*, 23 октября 1936 г., стр.3 ; *Молот*, 18 августа 1936 г.,стр. 3 参照。
- 124) *Молот*, 14 июня 1937 г., стр. 4.
- 125) *Там же*, 22 июня 1937 г., стр. 2.
- 126) *Правда*, 23 сентября 1936 г., 社説。
- 127) たとえば, コンバインによる取り入れの成功を讃えた連邦農業人民委員チェルノーフのオディンツォーフ宛ての電報(*там же*, 8 августа 1936 г., стр. 2) および注49) 参照。
- 128) *Правда*, 31 мая 1936 г., стр. 2-3 ; 23 октября, стр. 2-3.
- 129) 単位収量の向上を図る速効的な農学的措置として, 牧草輪作制が中央によって奨励されていたこ

とはすでに指摘したとおりである。シェボルダーエフ指導部もウマゴヤシ栽培による牧草輪作制の必要性を強調し、それまでの六圃制輪作から十二圃制輪作への移行を決定した。36年8月の第6回地方党委員会総会が定めた政策は、植林事業とならんで、十二圃制輪作（地区によっては十圃制輪作）による牧草輪作への移行を重要な柱としていた。*Молот*, 1 сентября 1936 г., стр. 2; *Правда*, 23 октября 1936 г., стр. 3 参照。しかしシェボルダーエフ失脚後になされた非難によれば、彼がすでに実施されていると中央に報告していた六圃制輪作さえ実際には行なわれておらず、「存在するのは二圃制あるいは三圃制であった」という。*Молот*, 15 июня 1937 г., стр. 2. なお、本稿では論じなかったが、36年以降、ソフホーズなどからコルホーズに土地が譲渡、編入されたこととも関連して、輪作制は一層混乱した。輪作を含め、当時のコルホーズの土地問題については、奥田央「1930年代におけるコルホーズ農村の土地利用について」溪内謙編『ソヴィエト政治秩序の形成過程』所収を参照。

- 130) 注105) 参照。
- 131) *Молот*, 14 июня 1937 г., стр. 3-4.
- 132) *Там же*, 12 декабря 1936 г., стр. 2. 市党委員会総会でこのように自己批判した書記コロティエリンも、その後、追放の憂き目にあう。
- 133) *Там же*, 14 июня 1937 г., стр. 4. かかる峻厳な粛清は数を達成することで忠誠を証明しようとした表れであるが、これも後には「警戒心の外観」を創り出すための「パーセントの追求」であると非難される。*Там же*, стр. 3.
- 134) 37年の春播きカンパニアの実施過程と、ラーリンやマリノフなど、旧シェボルダーエフ指導部の主要構成員の追放をみた37年前半の政治過程については、稿を改めて論ずる予定である。なお、ドンバス炭鉱における採炭量低下を非難した閣僚会議＝党中央委員会決定を契機に、4月以降、シャフティなどで大規模な粛清が組織され、アゾフ＝黒海地方における粛清は一層苛酷な様相を帯びた。
- 135) *Молот*, 14 июня 1937 г., стр. 4.
- 136) *Социалистическая реконструкция сельского хозяйства*, 1937, No. 4, стр. 7. ちなみに、オディンツォーフは右翼の指導者の一人と位置づけられた。
- 137) *Правда*, 6 января 1937 г., стр. 4.
- 138) *Социалистическая реконструкция сельского хозяйства*, 1937, No. 5, стр. 35.
- 139) たとえば、集団化期に関する代表的な研究として、溪内謙『スターリン政治体制の成立』全4巻、岩波、1970-86年；R. W. Davies, *The Socialist Offensive: The Collectivisation of Soviet Agriculture, 1929-1930*, Macmillan, 1980；*The Soviet Collective Farm, 1929-1930*, Macmillan, 1980；奥田央「集団化に直面するヴォルガ流域」『経済学論集』（東京大学）54巻1号～（未完）を参照。30年代前半については、注3）で掲げた論文のほか、富田「穀物義務納入制とコルホーズ」溪内編『ソヴィエト政治秩序の形成過程』所収；D. Thorniley, *The Rise and Fall of the Soviet Rural Communist Party, 1927-39*, Macmillan, 1988 がある。ソーニリーの研究は30年代後半にまで及ぶが、主たる検討対象は30年代前半であり、後半の時期についてはきわめて概括的な叙述に留まっている。
- 140) たとえば32～33年の危機においては、地区レヴェルの遠心化がかつてない程昂進し、党中央はМТСとソフホーズに政治部という特別の権力機関を設置してこれに対抗した。36年の場合には、トロイカや政治部といった特別の権力機関は組織されなかった。
- 141) *Известия*, 16 июля 1930 г., стр. 1；25 июля, стр. 3. ついでながら、北部＝ドン管区はアゾフ＝黒海地方創設後、新たに設けられた（同地方内の北部州が改組された）行政単位である。*Собрание узаконений и распоряжений РСФСР*, 1934 г., No.27, стр. 161, 163.
- 142) 溪内『スターリン政治体制の成立』第4巻, 750-770頁。
- 143) 注4) 参照。
- 144) アゾフ＝黒海地方の分割については、注2) 参照。ハリコフその他の地方については以下の日付の『イズヴェスチヤ』1頁を参照。1937年9月23日（ハリコフ, キエフ, ヴィンニツァ, オデッサ）, 24日（北部州）, 27日（東シベリア, モスクワ）, 28日（西部, クルスク, ヴォロネジ）, 29日（西シベリア）。本稿ではこれらの地方のうち、そのいくつかの農業カンパニアに簡単に言及するに留まった。本格的な検討は別の機会に譲りたい。

内 田 健 二

\*) 本稿は1990年度科学研究費補助金（一般研究C）による研究成果の一部である。なお、アゾフ＝黒海地方党委員会・執行委員会機関紙『モーロト』は富田武氏（成蹊大学）からの提供を受けた。記して感謝したい。

## Politics in the Soviet Countryside under the Great Terror :

The 1936 Crop Failure and Azov -Chernomorsk *Krai*

Kenji UCHIDA

This article analyzes a process of agricultural campaigns in the latter half of 1936 in Azov-Chernomorsk *krai*. Doing this, it intends to examine the following two hypotheses. First, division of the *krai* into Krasnodar and Rostov *oblasts* in 1937 was a reaction from the Party leadership to the *krai*'s poor performance in agricultural campaigns in 1936. Incidentally, Azov-Chernomorsk *krai* itself was a product of division of North Caucasus in 1934. One of the most conspicuous characteristics in the Stalinist formula of rule is that the regime reformed a scheme of administrative-territorial divisions, after it had somehow broken through critical situations in the countryside.

The second one relates to the background of the so-called Great Terror. A show trial towards "Trotskyist-Zinovievite groups" was held in summer 1936, and from then on hysteria of hunting "enemies of people" grasped the whole party organizations. It had become more fierce and extreme since the February-March Plenum of the Central Committee in 1937. Leaders of Azov-Chernomorsk became victims of the terror in 1937, too. A hypothesis here is that failures in the 1936 agriculture was an important factor which triggered off the tidal waves of purges in 1937.

Before discussing about Azov-Chernomorsk, we had better have a glance at the 1936 agriculture in the Soviet Union as a whole. In this year agriculture suffered from an unusually severe drought. The drought also heavily damaged fodder production, which would in turn raise a serious problem of supplying livestock with fodder, especially during the forthcoming winter.

With the very poor crop in mind, it is easily assumed that grain procurements in 1936 bore relentless features. Many plenipotentiaries were sent to the MTS and *kolkhozes*, and they arrested or imposed fines upon many *kolkhozniks* who did not fulfil assignments of grain deliveries. In spite of these harsh measures, procurements did not proceed with such a tempo as required by the Party leadership, except in a few regions. After all, grain procurements badly delayed and could be never said to have been successful as a whole. Many regions were, on the contrary, given aid of a great amount of grain, sowing seeds and fodder by the State.

Though Azov-Chernomorsk also experienced unusually unfavorable weather in 1936,

it could claim to have fulfilled its task of grain procurements earliest second to Crimea. On the other hand, autumn plowing of spring sowing area was faced with great difficulties. The *krai* could not eventually finish plowing within a time limit, that is by October 20. After the dead-line passed, threats to local activists became much more sharpened. On November 9, the *kraikom* issued an ultimatum, which was extremely harsh in tone and content. It demanded district leaders and activists to fulfil their tasks at any costs. As a result, repressions and arbitrariness prevailed everywhere.

With these severe measures, the *krai* at last fulfilled the plan of autumn plowing on November 21. But this meant at the same time a serious failure, because according to the Party leadership, the sooner in autumn fields were plowed, the more yields could be obtained, and the term of plowing should have been observed by all means.

A peculiar condition made it more difficult for Azov-Chernomorsk to conduct the autumn plowing campaign than other regions. The *krai* had to organize planting trees as a countermeasure against *sukhovei*, the strong and dry east wind, along with the plowing campaign. According to Sheboldaev, the *krai* lost nearly a half of crop every year under the influence of *sukhovei*. In December 1935, Stalin ordered the country that it should obtain "within three or four years 70–80 billiards *puds* of grain" every year. The Stalin's slogan obliged the *krai* almost to double yields. Assuming the Sheboldaev's argument cited above, it would be therefore rather natural for the *krai*'s leadership to have attached special importance to a tree-planting project.

In August 1936, the *kraikom* decided a three-year plan of afforestation, and began to organize a campaign in autumn. It did not, however, progress favorably as well as the autumn plowing. Both campaigns contradicted each other in practice. There was still a serious shortage of tractive forces including beasts of draft, and demands from both sides for them could not be satisfied at the same time. Many directors of the MTS were accused for having refused to offer tractors for plowing of tree-planting area, on a pretence of needs for the autumn plowing.

Northern Don *okrug* was reproached most severely for delaying in tree-planting. The decision of November 9 mentioned above thundered out words of warning in the *okrug* leaders' ears. It also strongly urged all the district leaders to engage themselves in tree-planting with the same resoluteness as in procurements campaigns. But unlike in the autumn plowing, even the ultimatum could not improve situations. After all, the goal could not be achieved both in Northern Don and in the *krai* as a whole. Thus the *krai* and the *okrug* ended the 1936 agricultural campaigns with serious failures remained.

A new year began in Azov-Chernomorsk with a great shock. On January 2, the Party Central Committee decided to remove Sheboldaev from his post as the first secretary of the *kraikom*. Andreev, a member of the Politburo, came to Rostov with the decision and directed its implementation. The plenum of the *kraikom* confirmed Sheboldaev's removal

and Evdokimov's appointment as his successor. Soon after this, the *krai's* leadership was almost totally reshuffled.

Under the new leadership, agriculture of the Sheboldaev era became subject to bitter attacks. The *krai* could not achieve one of the most important obligations, i. e. raising yields per hectare. Northern Don lagged far behind in this respect. On January 21, a decision was announced to abolish Northern Don *okrug*. Evdokimov explained its purpose, referring to the delay of agriculture in the *okrug*. According to him, *kolkhozes* there had needed proper guidance and help. Its abolition would make it possible for the *krai's* leadership to intervene directly into affairs in individual districts and *kolkhozes* there.

As for the question of Northern Don, Evdokimov further revealed that the Central Committee had issued two special decisions in 1936. The decisions included a serious warning to Sheboldaev and Larin in that if they did not succeed in raising yields in the *okrug*, they should be punished severely and might be removed from their posts. But they had in fact ignored the warning and had not taken any necessary measures, claimed Evdokimov.

Denunciation by the new leadership was also turned against the tree-planting plan. The plan assigned districts too high quotas of plantation. It was said that in some districts, *kolkhozes* had to offer all pastures and meadows in order to fulfil their quotas. This reduced the area of pastures and meadows to a considerable extent, which would in turn affect fodder production negatively. As was shown previously, fodder production in 1936 suffered from heavy damage caused by the drought. Many of livestock died from short supply of fodder in Azov-Chernomorsk as well as in other regions during the winter of 1936–37. This disaster perhaps taught the Party leadership a lesson of the necessity of expanding fodder production. The tree-planting plan should have been denounced for having curtailed fodder production and damaged stock raising.

The change in the *krai's* leadership ought to be regarded as a result of interactions of many factors. However, we can safely conclude, from what has been discussed, that the poor performance in the 1936 agricultural campaigns played at least a significant role in the change.

At the beginning of 1937, purges swayed not only in Azov-Chernomorsk but also in other regions. A number of leaders of agriculture in those regions, where the 1936 agricultural campaigns had failed or had been faced with great difficulties, were arrested as enemies. The Stalin's ambition to harvest 70 ~ 80 billiards *puds* of grain was miserably blighted in the very first year. Purges of agricultural leaders can be regarded as a reprisal to it. At least one phase of the tidal waves of purges in 1937 was triggered off by the failures in the 1936 agriculture.

The year of 1937 saw large-scale reorganization of administrative-territorial division.

Here too, a lot of those regions became subject to it where agriculture had shown a poor performance in 1936. Odessa, Kursk, Voronezh and West Siberia and others were divided into two or curtailed their territories. The abolition of Northern Don was already mentioned. The reorganization in 1937 was the third as a large-scale one in the 1930s. The first was the abolition of *okrugs* in July 1930, and the second was the division of districts and regions in 1934. In any case of the three, collectivization or agricultural campaigns prior to it were faced with serious difficulties, and the Party leadership realized that the control from above so far had been still ineffective. It hence tried to further enforce control over the local party organizations and the countryside, by reforming the administrative-territorial scheme. Thus the territorial reorganization constituted a major part of the Stalinist measures against crises.